

1 年次 研究のまとめ

本校において I C T 利活用にとどまらない情報活用能力の育成について、それを着実に児童生徒に身につけていけるような授業実践を重ねていくことが必要であると考え、2 年計画にて情報活用能力育成のための授業づくりに焦点を当てながら研究を進めてきた。

小学部では「小学部段階における情報活用能力とは何か」「その指導の際に大切にしたいことは何か」を明らかにしていくこととした。取り組みの中で事例対象児童 2 名の情報活用能力について検討を重ねてきた。そこで考えてきたことを通して、もう一度、“担当の児童にとっての情報活用能力とは”“その指導のために大切にしたいこととは”の 2 点を考えた。実践の中で情報活用能力をとらえていく中で低学年と高学年の違いが顕著に出た。高学年になると、情報を得る対象となる人が徐々に友達まで広がりを見せることもあるようであることが分かった。一方で、低学年においては教師から情報を得る場面が多く、学校において身近な人である教師との関係性の大切さや教師がどう意図的に適切に情報を扱うかの重要性について再確認できた。そして指導上大切にしたいことが①環境設定をすること（情報を得たり、発信したりしやすい環境を意図的に設定する）、②得た情報を伝える場面をつくること、言葉の力をつけること（語彙を増やす等）、③体験や経験を大切にすること（それを伴った身のある言葉をもつこと）、④興味のあることを入り口に、やりとりを広げていくこと（人との関わりの基盤づくり）の 4 点であることを改めて共有することができた。

中学部では情報機器をどのように活用すると課題としている個の目標に迫っていけるのかについて考えてきた。多岐にわたる情報活用能力の中でも『「考えや思い」を生徒自身が他者へ伝える力』つまり「情報発信スキル」について着目し育成してきた。PDCA の中で特に「自分の知識（言語）を使い、他者へ発信する力」について成長が見られた。発語に課題のある生徒が発信する際にどうすれば他者へ伝わるか情報機器を使いながらやりとりを重ねた。その中で生徒自身が「こうすれば伝わった」と経験の中で気づき、同じ場面を教師が設定することでどのように発信するかを自ら考えて伝えようとする姿が見られた。また、情報機器のみではなく身振り、筆談などの発信方法を教師とのやり取りの中で使いながらその良さ（より伝わりやすいと感じる）を知ることによって様々な方法で伝えようとする様子が見られ始めている。生徒が発信する際にその生徒にとって何が最適かを考えていく中で「発信方法の選択肢を設定すること」さらに「発信する場面に応じ臨機応変に発信方法を選び、使っていく力を生徒につけさせること」が必要であることを確認することができた。

高等部では生徒にとって、本校卒業までのどのような情報活用能力を身につけておく必要があるか検討・整理を行った。「I C T 活用能力チェックシート」を用いて、それぞれの段階の生徒が卒業時にどこまでできるようになっているとよいのかについてまとめ、それをもとに授業の単元計画を立てることとした。そして単元計画の中に、どのように情報活用能力を育成する内容を扱うかについても明記しそれをもとに授業を行い、授業の振り返りを行ないながら、行った手立てが適切だったか、改善が必要かなどについてまとめ、授業づくりについて考えていった。今年度は「社会／自立活動」の授業について学習グルー

プごとに話し合い、実践を進めた。取り組みの中で情報の受け取り方や情報を相手に伝える方法についてそれぞれグループの実態に応じた支援や手立てを検討することができた。情報の受け取り方として、自らＩＣＴ機器を活用して情報を得る実態のグループや教師からの手助けを受けて情報を得る実態のグループ、ＩＣＴ機器を使わずに、感覚的なものを大切にする必要のある実態のグループなど、情報活用能力に関する生徒の実態を改めて把握することができた。その上で、どのような手立てで学習を進めることで身につけさせたい情報活用能力の育成を図ることができるかについて、社会／自立活動の学習で有効な手立てを検討することができた。どの実態の生徒についても、学習の中では特に情報をどのように受け取るか、相手に伝えるかの力が重要であることが各グループで検討された。生徒の情報活用能力の実態について、丁寧に読み取ることとともに、実態に応じた適切な手立てを設定する必要性について高等部の教師全員で再確認できた。

寄宿舎では昨年度からのテーマである「余暇の充実」について情報活用能力を生かした寄宿舎生活を過ごしていけるように考えていった。舎生２名を事例対象に設定して余暇の過ごし方について情報活用能力に育成に焦点を当てながら実践を行ってきた。情報活用実践シートを通して様々な場面で情報活用能力（基本的な操作・情報モラル・情報セキュリティ・収集・整理・保存・発信・伝達・共有・比較・プログラミング・統計）が複雑に関係し合っていることが分かった。情報活用の幅が広く、情報活用能力が関連し合っていることから難しさを感じたが、各実践で関係する情報活用能力と、育みたい情報活用能力を明記してどこに注目するのかポイントを絞って取り組んだことで指導員の情報を活用することに対する意識が高まり、どの情報活用能力に対してどのようにアプローチするのかを見失わずに指導することができた。また、指導員間で何をねらうのか、どのような支援や手立てを行うかを共通確認しながら丁寧に指導を行うことができた。

以上のように教師が同じ視点に立ち、児童生徒の情報活用能力をどう育成していくかについて１年間を通し実践を重ねてきたことは大きな成果であるといえよう。実践を通して見えてきた成果と次年度へつなげていくための課題について以下にまとめていくこととする。

体験的な学習の重要性

情報機器の活用について考えていく中で従来の実践の中で大切にされてきた、「実体験を重ねていき、実感を伴わせながら学習したことを身につけていく」ことの重要性について改めて確認できた。授業の中で得るべき情報を児童生徒が理解し、収集するために、ことばや数につながる基本的な概念を身に付けることが必要となる。概念形成の手立てとして教材のやり取りを通し児童生徒の見方・考え方を整理していくことが大切にされてきた。具体物の操作、体験的な学習を通し学習の基盤となる言語能力、問題発見・解決能力等についても育成されている。これまで同様に情報機器を使いながら体験的な学習を大切にしていける視点をもつことが重要となると言える。また、各学部、寄宿舎の実践からも分かるように情報機器活用による知識、経験と体験的な活動の往還により、より深い学習活動の展開が期待される。

授業をはじめとする取り組みの中でどの情報活用能力を身につけさせるか見極めていくこと。

情報活用能力については特別支援学校小学部・中学部学習指導要領解説総則編に「学習活動において必要に応じてコンピューター等の情報手段を適切に用いて情報を得たり、情報を整理、比較したり、得られた情報を分かりやすく発信・伝達したり、必要に応じて保存・共有したりといったことができる力であり、さらに、このような学習活動を遂行する上で必要となる情報手段の基本的な操作の習得や、プログラミング的思考、情報モラル、情報セキュリティ、統計等に関する資質・能力等も含むものである。」と示されている。このような多岐にわたる情報活用能力をバランスよく身につけさせることの必要性が高等部をはじめとし、どの学部においても再確認された。グループや個々の課題によりどのスキルが必要であるかは変わってくる。授業づくりの視点において単元計画の中で何を身につけさせるか、そのために必要な情報活用能力は何かということを考えていく必要がある。この視点は次年度の授業づくりの取り組みにつながれると考える。

児童生徒にとって「情報」とは学習環境すべてから得られるものであり、意図した環境設定が重要である。

周囲の環境、つまり共に学ぶ友達、教師から得られる情報が大きいことが小学部の実践をはじめとし共通確認できた。教材の提示や教室環境のみではなく、活動の見本として周囲の人から情報を収集し見通しにつなげていく姿が多く見られた。すべてが「情報」を得る手段となるものということは、教師が授業の中でどの情報を児童生徒に提示するか考えながら展開していかねばならないということである。児童生徒への教材の提示のタイミング、見本となる人（教師、友達）、見本の活動について、意図をもって授業づくりを行う必要がある。

また、中学部の実践から児童生徒が発信する場面を教師が意図して設定すること、その際に発信方法の選択肢を増やしていくことの必要性があることが分かった。1つの授業の中ではなく単元計画にてどの段階で得た情報を児童生徒に表現させるか、考えていきながらPDCAサイクルにてより深い学習を展開していくべきである。

以上の3点を確認、共有、周知できたことが今年度の成果である。次に課題について示す。

情報活用能力を含めた丁寧な実態把握

今年度の実践の中で教師が話し合いを重ね、対象となった児童生徒の実態について丁寧に見直しを図った。特に学部の中で児童生徒が授業の中でどのように情報収集を行っているか、について考えていった。

生活年齢、学習の内容等によって、求められる情報活用能力も変わってくることを授業づくりの中では考えていく必要があった。得られた情報について分かりやすく発信、伝達していくための力を育成することが求められている。単元計画の中でどんな目標を立て、目標達成のための活動を設定していくかを考えながら、実践を重ねていくことが必要である。これまでの指導の蓄積の中でも挙げられている丁寧な実態把握が重要となりさらに、育成したい情報活用能力についても現段階の様子について教師が改めて見直して評価していくことが必要であると考ええる。

実践についての見取りの評価

実践の評価について児童生徒の実態や変容を動画やエピソードを集めていくことで成長を見取ってきた。生徒の見取りの方法について校内研究のように時間を設定し実践内容を伝えあい複数の教師の目で見えていく必要を強く感じている。また、情報活用能力のどのスキルを育成するかの見取りの視点をもっていることも重要であると改めて分かった。さらに教師間のみではなく客観的に評価できるような体系表などのツールを用いると評価の妥当性が高まると考えられる。

以上の2点について次年度への課題とした。より確実な実態把握、見取りの評価についてはやはり教師の専門性が不可欠であると考ええる。専門性、特に指導力を高めていけるように情報活用能力育成について教師一人一人が意識を向けながら実践を重ねていけるとよい。情報活用能力育成のための授業をさらに蓄積することにより「基礎的・基本的な知識及び技能の習得と情報活用能力の育成」といった学校指導重点の具現化を図る一助となると考えられる。

〈引用・参考文献〉

中央教育審議会答申（2018）「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」

文部科学省「新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議報告本文（2021）IV ICT利活用等による特別支援教育の質の向上」P. 21-24

文部科学省（2018）「特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 総則編（幼稚園・小学部・中学部）」P. 204-209

文部科学省（2019）「教育の情報化に関する手引」P. 23, 24

山梨県教育委員会（2024）ICT活用チェックシート